# 中小企業のデジタル化を推進するためのコアインボイス活用

三分一信之

三分一技術士事務所所長

ISO/TC 295/SG 1 Convener

# JP PINTは万能薬か

デジタルインボイスの普及によって、会計データの標準化や、経営に役立つ情報の共有が促進されることも期待されています。これは、税理士や企業が効率的に会計処理や税務申告を行うための重要なステップです。データの一元管理が可能となり、データ入力のミスを減らしたり、情報の検索や分析が容易になったりします。これにより、経営の効率化やコスト削減が実現できます。

令和２年１２月、内閣官房IT総合戦略室は、日本における電子インボイスの仕様を標準化するために、国際的な電子商取引ネットワークの標準、Open Peppolを基盤にすることを発表しました。これにより、日本のPeppol（JP PINT）が生まれ、その運用を監督する機関が整備されました。

ただし、各種のデジタルインボイスを相互連携させるには、電子データ交換（EDI）を含む全ての請求データをやり取りする「日本版コアインボイスモデル」が必要です。そして、そのモデルとEDIの構文を組み合わせた「コアインボイスゲートウェイ」でEDIとデジタルインボイスを接続することが可能になります。

現在のJP PINTのサービスプロバイダは、オープンペポルのデジタルインボイスしか受け付けていないため、対象範囲が限定されています。そこで、「構文バインディング」が重要な役割を果たします。これは、異なるXML構文やセマンティックモデルを統合するための技術で、EDIとデジタルインボイスを相互運用することを可能にします。

それぞれの企業の会計データを標準化し、共通のインタフェースを通じてデータを参照可能にすることで、税理士や企業が税務申告をより効率的に行うこともできます。さらに、標準化されたデータは、経営判断に必要な情報を提供し、企業の競争力を高める役割も果たします。

# 貨物船コンテナの積み替え作業に例えると

貨物船の輸送におけるコンテナの積み替え作業を例えに取りながら、コアインボイスというシステムについて説明します。

コアインボイスは、中小企業共通EDIやJP PINTなどの異なるデータ形式で表現された請求書を、一つの共通の形式で統一的に扱うためのシステムです。港でコンテナを積み替える際に、ピッキングリストに従って請求金額、商品名、数量、金額、税率などを取り出し、指定された船倉に異なったまとめ方で格納します。

この作業は、自動運転されるクレーンによって行われ、コアインボイスの論理モデルの定義表やピッキングシート、格納指示リストなどに基づいて指示されます。これらの指示は、タクソノミで定義された辞書によって表現されます。

このように、コアインボイスは異なるデータ形式を統一的に扱い、効率的な請求書の処理を可能にするシステムです。日本版コアインボイス ゲートウェイは、このシステムを実現するための機能を提供するものです。

コンテナの積み替え作業を例えにとった説明を続けます。コアインボイスシステムは、まるでコンテナ積み替えのように、異なる形式の請求書を一つの共通形式に変換し、それを統一的に管理する役割を果たします。

# 構文バインディング

構文バインディングという言葉は少々専門的ですが、簡単に説明すると、異なる形式のデータを一つの形式に統一するためのルールや手順のことを指します。それを用いることで、デジタルインボイスの情報を容易に取得・設定できるようになります。

例えば、ある情報を表すために異なる会社がそれぞれ違う形式を用いていたとします。一方は「商品名-数量-価格」の順で、もう一方は「数量-商品名-価格」の順で情報を表現しているとします。このような場合、同じ情報でも表現の仕方が異なるため、それぞれ異なる読み取り方をしなければならず、その都度読み方を変える（プログラムを改修する）のは非効率的です。

そこで、構文バインディングを導入することで、「商品名-数量-価格」の形式に統一するといった具体的なルールや手順を設けるのです。これにより、どの会社からの情報であっても同じ読み取り方ができ、効率的に情報を取り扱うことが可能になります。

たとえば、ある企業が別の企業から商品を購入する際に、それぞれの企業から異なる形式の請求書が送られてきたとします。ここで、それぞれの請求書を個別に処理しようとすると、手間と時間がかかり、エラーが発生する可能性もあります。

しかし、コアインボイスを使えば、異なる形式の請求書を一つの共通形式に変換し、統一的に管理することができます。これにより、請求書の処理が効率化され、エラーの発生を防ぐことができます。

コアインボイスの活用は、取引のスムーズな進行だけでなく、企業の経営効率化やコスト削減にも寄与します。経理部門の作業負荷を軽減し、より重要な業務に集中できるようになるためです。

また、コアインボイスは、取引データの一元管理を可能にします。これにより、経営判断に必要な情報の把握が容易になり、迅速な意思決定を実現できます。さらに、税務申告の際にも、一元管理されたデータを利用することで、効率的な申告作業を実現できます。

コアインボイスは、企業がデジタル化を進める上で重要なツールと言えます。これからの時代、企業は様々な形式のデータを効率的に扱う能力が求められます。コアインボイスを活用することで、企業はデータの扱いにおける効率性と正確性を確保し、競争力を高めることができます。

# 欧州規格の異種構文間バインディング

欧州では、デジタルインボイスの普及を推進するために、共通の標準を設けています。これは、各国で異なる標準が採用されていたため、国境を越えた商取引が阻害されていたという課題から生まれました。

具体的には、欧州議会および理事会の「指令 2014/55/EU」に基づき、電子請求書の最低限の共通構成要素を「コアインボイス」として規定しました。また、各国で採用されているXML構文（情報の表現形式）の中から普及しているものを選び、「構文バインディング」（情報の統一形式）を規定しました。

これにより、各国の異なる標準を一つの形式に統一することで、国境を越えても同じ読み取り方ができるようになり、商取引のスムーズな進行が可能になりました。

# 日本版コアインボイスゲートウェイ

日本版コアインボイスゲートウェイは、中小企業がデジタルインボイスを利用するための便利なツールです。具体的には、中小企業共通EDIとJP PINT v1という二つの異なるデータ形式間のデータ変換を行う役割を果たします（試行中）。

これにより、中小企業でもOpen Peppolという世界的なデジタルインボイスネットワークのアクセスポイントに接続することが可能になります。このゲートウェイは、日本版コアインボイスのセマンティックモデル（データの意味を表現するモデル）に対応したCSVの標準データ形式を利用しています。

また、他の業界EDIの利用者も、Open PeppolのSMPに登録していれば、このゲートウェイを経由してデジタルインボイスを送信することができます。

業務システムで接続先ごとのデータ処理インタフェースを運用している企業もあります。大手企業では、これに対応するために個別の調達ポータルを提供していることもありますが、その維持管理が大きな負担となっています。

日本版コアインボイスゲートウェイで使用される標準データインタフェースは、社内システムと連携させるために、アクセスポイントでの使用と同様、複数のインタフェースを組み合わせることが可能です。また、CSVファイルの構造や意味はタクソノミで定義されています。そのため、タクソノミの維持変更管理と連動させることで、システムの維持管理を自動化することもできます。

# デジタルインボイスを契機とする会計のデジタル化

ジタルインボイスは、会計のデジタル化において重要な役割を果たしています。国際標準化機構（ISO）のAudit data services (ISO/TC 295) では、請求書や帳簿データ、商取引文書などの重要な会計監査対象データを標準化するための取り組みが行われています。私はISO/TC 295のStudy group 1（semantic model）のConvenerを務めており、異なる業界や国の会計データを共通のデータ形式で表現するために、セマンティックモデルの定義に取り組んでいます。

これにより、会計データの標準化インタフェースを提供するために、標準データ形式を使用し、タクソノミを利用して会計のデジタル化を実現すべく草案作成中です。なかでも、デジタルインボイスは、会計データの標準化に向けた重要な一歩となっています。

# 中小企業にとってのコアインボイスゲートウェイと構文バインディング

コアインボイスゲートウェイと構文バインディングは、中小企業にとって請求書の作成や取引先とのやりとりを効率化するために重要なツールです。コアインボイスゲートウェイは、異なるフォーマットの請求書を統一的に処理し、請求書の標準化を促進します。一方、構文バインディングは、データを自動的に抽出し、正確な情報を含んだ請求書を作成することで、請求書作成の手間やミスを削減し、業務の効率化を図ることができます。

さらに、会計データの標準化や共通のCSVインタフェースの導入により、中小企業は取引先とのビジネス関係を改善することができます。共通のインタフェースを使用することで、データのやり取りがスムーズに行われ、取引先とのコミュニケーションも円滑になります。また、会計データの標準化により、会計処理の効率化や精度向上が期待できます。

中小企業にとって、コアインボイスゲートウェイと構文バインディングの取り組みは大きなメリットがあります。効率的な業務処理やビジネス関係の改善により、企業の業績向上が期待できます。また、税理士は、会計データの標準化や共通インタフェースの導入に関するアドバイスや支援を提供することで、企業の経営に貢献することができます。税務申告や決算書作成に加えて、企業の業務プロセスの改善にも取り組むことで、より総合的なサポートを提供することができます。

中小企業は、リソースや予算に限りがある場合がありますが、コアインボイスゲートウェイや構文バインディングを活用することで、デジタル化のメリットを享受することができます。これらのツールや取り組みを活用することで、効率化、正確性の向上、ビジネス関係の改善など、中小企業の経営にプラスの影響をもたらすことが期待されます。

中小企業の経営者や税理士は、デジタルインボイスやその他の関連技術の動向に注意を払いながら、自社の業務プロセスを見直し、効率化やデジタル化への取り組みを進めることが重要です。これにより、競争力の強化やビジネスの成長を実現することができるでしょう。

■